
観測者と三人の王 番外編

成露 草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

観測者と三人の王 番外編

【Nコード】

N4158Z

【作者名】

成露 草

【あらすじ】

観測者と三人の王の番外編です。本編を読まなくとも話が分かるようにするので、こちらだけ読んでいただいてもかまいません。

聖帝騎士の朝

早朝、隣人が飼っている鶏の鳴き声で、俺 オガタセイジロウ 緒方清二郎 は
目が覚めた。

昨日飲みすぎたせいで頭が痛い。鶏の甲高い声は大いに俺の頭痛
に貢献した。

「くそっ・・・薬、貰ってくるか」

この世界の一般的な酒は、薬の耐性が強い奴でも酔えるように出
来ている為、それ専用の解毒薬でなければ二日酔いを治すことはで
きない。他世界の酒に比べると少々厄介な酒だが、解毒薬さえ飲め
ば酔いを一瞬で覚ますことが出来ることから、俺は好んで飲んでい
た。毎回薬をもらいに行くことになるのだが。

朝食を作るのも億劫だったので、城の食堂で食べれば良いかと

二日酔いの時は常にこうだ 制服を着て部屋を出た。

朝日が眼に痛いほど輝く中、大通りはすでに人で賑わっていた。
焼きたてのパンの匂いが漂ってきたと思えば、魚の生臭い匂いが鼻
を突く。

売り子の声は鶏の声ほどではないが、俺の頭にダメージを与えた。
朝市の客は、人間と昼型の獣人がほとんどだ。時々、エルフも眼
の端に映る。

コーヒートを露店で買った俺は、完璧にこの朝市の一部になってい
た。

移転で城まで行ってもいいが、なんとなくこの空気が好きで、途
中防音魔法を自身に懸けはしたが、俺はのんびりと登城した。

城は正方形の形をしていて、俺が必要としている薬と食堂がある
のは西側に門がある観測者の領域だ。

流石に、俺がいる聖帝の領域である南側の門からそこまで歩く気
はないので移転で一気に飛んだ。

他世界からこの世界に来た俺にとって、門番がないということ

は驚きだった。俺の故郷では、どこの国の城でも、いや、金があれば貴族だって門番を置いていたからだ。

しかし、人間は環境に適応していく生き物だ。ある程度の月日が経てば慣れてしまう。俺も人間の例から洩れず、半年経つ頃には違和感も覚え無くなっていた。

「だが、これはないだろう」

この国で暮らしを始めて5年経つので、他世界では体験できない色々な事に慣れたが、門が無くなっていったことには驚かされた。

ここの城には外壁がないので、城に直接付いている門が破壊されると中が丸見えになってしまう。実際、通路に敷かれた真紅の絨毯が、大理石の破片と土で汚れていた。

敵襲……などと言うことはあり得ないので、恐らくどこかの馬鹿が馬鹿をやったのだらう。俺はひとつため息を吐くと、その惨状を横目に中に入った。この程度のことですら騒がないのは、この世界では常識だ。一々騒いでいたら、それだけで1日が終わってしまう。それに、これが何時起こったことかは知らないが、遅くとも今日の午後までには元通りになっているだろう。

中央階段を上がって少し行ったところに医務室がある。

観測者は、この世界で誰よりも遥かに知識が深い。それは他王にも追従が出来ないほどだ。観測者は世界中の文化を記憶・管理することが仕事なので、必然とそうなったのだろう。

結果、医療知識も観測者が一番詳しい事になり、10年前から医療に関する事は、どの王の民など関係なく、全て観測者の管轄となった。

これを知った時、俺は門番有無以上の衝撃を受けた。管轄を許すと言うことは、権利を引き渡すのと同じことだ。更に、それは依存となり、敵対した際に大きな障害となる。

しかし、同じ城に集まって暮らしている事や、気軽にお互いの領域を行き来していることから、王同士の良いさが窺えた。それに何より、この世界が出来て5000年以上は経っているにも関わら

ず、一度も戦争が起こっていないことが何よりの証拠だろう。

ただ、観測者だけは他王と違い、『2代目』で、就任からまだ1年しか経っていないが、聖帝の実の子、竜帝の義理の娘、魔王の親友という関係性が時間の差を埋めているようだ。

「おはようございます」

医務室と書かれた看板が釣られた、細かい装飾が施された木製の扉を挨拶と共に開けた。

ここの看護師は挨拶だけには厳しい。一度無言で扉を開けたことがあったが、治療が終わった後、一時間近く正座で説教をされた。

「あら、緒方さん。おはようございます。今日も二日酔いですか？」

ここの常任看護師であり、受付嬢のミアンナが俺を見てそう言った。

俺が朝、ここに来る時は二日酔いの時しかないので、そう言いながらすでに解毒薬を出している。

「ああ、貰って行く」

薬を受け取ろうと手を伸ばすと、薬に手が触れる前にミアンナに手首を掴まれた。

ミアンナはかなりの美少女だ。身長は俺の肩辺りまでしかなく、柔らかかそうな栗色の髪がふわわりと彼女の顔を覆っている。大きな亜麻色の瞳で甘く見つめられたなら、どんな男でも彼女の頼みを聞いてしまうだろう。

そんな彼女がどこから取り出したのか、櫛と真紅のリボンを片手に持って、目をキラキラさせながら、俺に声を低くして言った。

「その前にその頭をなんとかさない？」

「・・・はい」

医務室の花、ミアンナ。子供を八人も産んだ母親である。一番上の息子に会ったことがあるが、どう見ても30過ぎのオッサンだった。

どんな猛者であろうとも彼女からすれば皆子供。渾名は『姐さん』である。

ミリアンナにつけられそうになったリボンを何とか拒否し、俺は黒ゴムで背中の中ほどまである黒に近いこげ茶色の髪をひとつに束ねた。

観測者は医療に関することは全て無料としている。薬代も掛からない。

だが、ここを利用した奴は、大体これぐらいでは？ という勘で料金を払っていく。俺も払った。なぜ無料なのにそんなことをするかと言うと、それにはここの恐ろしいポイント制が関わっている。

俺がこの世界に来て3か月ほど経った頃、その悲劇は訪れた。

俺が10回目の解毒薬を貰いにいった翌日、上司経由で医務室からのメッセージカードを受け取った。そこには「マンドラゴンの根・500グラム、幡千華の茎・1キロ、一週間以内」と書かれていた。意味が分からず上司に聞くと、なんでも、医務室には使用ポイントというものがあり、それがたまるとうこのようにお使いを頼まれるようになっていているらしい。

当時の俺は、まあ、医療なんていう金のかかるものがお使い程度で済むなら軽いものだよな、と夕方を括っていた。そして、書庫でそれらがどこに生えている植物なのかを知らべ、このお使用の恐ろしさを知った。

まず、これらの植物はこの世界に存在していなかった。どちらも異世界の物だ。しかも別々の。これはまだ良い。探索魔法を使えば大まかな絞り込みは可能だからだ。問題はこれらの植物が群生していないことと上級魔獣の住処にしかないところだった。

その後、正確な数は覚えていないが、俺は少なくとも30回以上はトリップを繰り返し、期限ぎりぎりにお使いを終えたのだった。

あのメッセージカードは発行されたら最後、拒否権はない。そのため、ポイントをためない為の唯一の方法である、勘による代金支払いをするのだ。代金がいくらなのかミリアンナや医者達は絶対に

教えてくれないし、代金が少ないとポイントが加算されてしまうので、何時もそれなりの額を払うようにしている。

あの後、俺は一度もメッセージカードを貰ったことはないので、足りないという事はないのだろうが、いくら無駄に払っているのか地味に気になるところだ。

上司曰く、絶対に出来ることしか頼まれならしいが（子供の場合、普通に市場でお使いだそうだ）、若いからと言って観測者を舐めてはいけないと俺は思った。

医務室と同じ階にある大食堂を観測者は一般にも使用可能としている。この料理は、ありとあらゆる世界の物が出される。安くて旨いと言うことで常に大盛況だ。料理の内容は一週間ごとに一掃されるようになっていて、好評だったものは町のレストランにレシピを売り渡したり、本を出して利益を出している。

俺は、10種類あるメニューの中から『パルパ鳥のサンドイッチ』を選んだ。昨日の昼に食べた『坦々麺』が旨かったので、また頼もうかとも思ったが、朝からは重すぎるのでやめた。

「セイ！ おはようさん」

俺がカウンターで料理が出てくるのを待っていると、同僚のクルド♠シャルイードが声をかけてきた。

「ああ、おはよう」

クルドは竜の獣人、竜人だ。金髪碧眼で甘いマスクを持っている上に、竜人の特徴である温厚さと一途さから多くのファンがいる。夢見がちな女が見たら「王子様！」と叫ぶかもしれない。見た目が20代後半なのに、口調が少々オヤジ臭いが、実年齢は1000歳を軽く超えているらしいので仕方ないだろう。

「ん？ セイ、お前また二日酔いか？」

薬は水なしで飲めるものなので医務室を出て直ぐに飲んだが、鼻

のいい竜人にはわずかに残る残り香で分かったらしい。からかうような声色なのに表情は爽やかな微笑にしか見えない。

本人曰く、ニヒルに笑っているつもりらしい。クルドのおかげで美形にも出来ないことがあるのだと知った。

「ああ、飲みすぎた」

「たったあれっぽつちで二日酔いたあ、お前は本当に酒に弱いな。ところで、何を注文したんだ？」

「クルドが強すぎるんだ。俺が弱いわけじゃない。パルパ鳥のサンドイツチだ」

俺が言い終わるとほぼ同時に料理が出てきた。出てきた『パルパ鳥のサンドイツチ』は固めのパンに俺の掌ほどもある肉の塊が大量の野菜と共に挟まれているものだった。それも2個。

「・・・ひとつ食べないか？」

「セイは胃も弱いんだな」

いくらなんでもこの量は食べられないとクルドにひとつ進めるとため息交じりにそう言い、ほんの3口でそれを食べきった。

大口で食べているはずなのに優雅な食事風景に見えるのだから美形とはつくづく得な生き物だ。

その後、『パルパ鳥のサンドイツチ』を2個と『坦々麺』を3杯、『角煮定食』4セットを注文したクルドと共に朝食を済ませた。

朝食を食べ終わった後は、魔術を使えないクルドと一緒に移動させ、聖帝の領域にある俺たちの仕事場まで移動した。机の上には大量の書類が山となって乗っている。

俺もクルドも騎士なんていう職業に就いているが、週に1回か2回、聖帝が起こす問題に駆り出される以外はほとんど書類仕事だ。

思わず現実逃避のように窓の向こうに目をやると、青い空の中を巨鳥やグリフィン、ドラゴンが飛んでいるのが見えた。

小鳥などと言う可愛いものが一切いないが、いつも通りの平

和な光景に何とも言えない充足感を覚え、手を動かし始めた。

観測者部下の戦い

観測者様の部下の朝は早い。

陛下に忠誠を誓った私、セルディン＝シエル＝リードの朝も勿論早い。起床時間は朝日が昇る2時間前だ。

なぜなら陛下の起床時間が大体早朝だからである。だから陛下につつがなく執務をしていたために、陛下が御起床になる頃には必要書類を完成させなければならぬ。とは言っても前日に、翌日の必要書類は完成させてしまっているので、長期書類の方がメインだが。

陛下は半身の影響で眠欲に特化されており、1日に最低でも12時間はお休みになる。通常の睡眠時間に加え、お昼ねなどをお取りになるのだ。

この世界では常識だが、王の方々は皆、対になっていらっしやる。聖帝は竜帝と、観測者様は魔王と半身なのだ。

そこで出てくるのが、特化と欠如。それは、各々の性格にも大きな影響を及ぼしているらしい。それが良いのか悪いのか、私には判断がつかない。だが、はつきり言ってそれは大した問題ではない。なぜなら陛下は素晴らしい方だからだ！

問題は身体的に表れる特化と欠如である。これは、半身の片方が三大欲求のどれかに特化すると反対はそれが欠如するというものだ。宰相閣下曰く、特化した方の半身に、欠如した方の半身の欲が流れte行ってしまっているのではないかとのことである。

つまり、陛下が1日の半分以上もの時間を睡眠に奪われてしまっているのは全て、陛下の半身である魔王が原因であると言うことなのだ！ 魔王め！ 許すまじ！ 貴様の所為で私と陛下との接触時間が大幅に削られているのだ！ 唯でさえ、多忙な陛下を私の様な下っ端が拝見するなどままならないことだというのに！ ああ、宰相閣下や従者殿が羨ましい！ 宰相閣下は仕事で、従者殿は私生活

で陛下に付きつきり！ それに対して私が陛下を拝見出来るのは、通路を移動する時の凜々しくもお美しいお姿と、庭でお昼寝をなさっている時の愛らしい寝が　ゴホンッゴホンッ！！

ああ、らしくもなく興奮してしまっただ。ですが、それほど私、いえ、私達は陛下を愛し、尊敬しているのである。

そして、今日も今日とて、我らが陛下のために私が仕事に精を出していた時、なんと奇跡が起こったのだ。

正午少し前、私は区切りのよい所まで仕事が終わわり、食堂へと向かっていた。その時、なんと正面から陛下がこちらに向かって歩いてきているではないか！ しかも従者殿を連れず、お一人である。あまりに珍しいことに驚きながらも、陛下を拝見出来た喜びに私の胸は震えた。私は緊張で震える手に力を込めながら、通路の端により出来うる限り優雅に頭を下げた。陛下の足音は真紅の絨毯に吸い込まれまったく聞こえない。しかし、優しく香る金木犀の香りから陛下が近づいてくるのが分かった。普段、陛下は私達が視界に入ると一言声を懸けてくださる。近くでお声を聞くことが出来るだろうかと期待に胸を振るわせっていると、陛下の足が私の視界に映った。このように近くに陛下がいらっしやることは初めての経験だ。心臓の音が頭に響く。頭が爆発しそうだ！

そんな私の耳に陛下の涼やかな声が優しく響いた。

「あなた、セルディンさんだよ。この後暇？」

「……は、はい！ とても暇です！」

一瞬陛下の声に聞き惚れ、返事が遅れてしまった！ しかも内容が変だ！　ああ、だがそれ以上に陛下が私の名前をご存じだったことが何ともいいがたいほどの喜びを私に与える。

私が羞恥と歓喜に、顔を真っ赤にしていると陛下は優しくおっしゃった。

お願いしたいことがあるの、と

着いてきて、と言う陛下のお言葉に従い、後に続くと、着いたのは陛下の私室であった。陛下は、どうぞ、と一言言々と部屋に入っ

ていく。私もそれに慌てて続いた。

扉の作りは他のものと大差なかったが、部屋の中はとても豪華だった。派手と言うわけではなく、調度品の質が違うのである。だが、今の私にはどんな優美な調度品もかすんで見えた。

陛下は部屋の右側に置かれていた長椅子に腰かけると私を見た。一瞬目が合ってしまった慌てて頭を下げる。

陛下の御気分を害してしまったのではないかと内心冷や冷やしなからも、この程度のことでは陛下のことを狭量だと思っいる、と感じられてしまうのではないかと考え頭を悩ませていると、髪に優しく何かが触れた。

「ふふ、サラサラだね。気持ちがいい」

その声で、今私の髪に触れているのが陛下の手であると気付いた。考えなど頭から吹っ飛び、頭に感じる優しい感触と今まで嗅いだ事がないほど濃く香る香りに神経が集中する。

あまりの心地良さに緊張が解れ、うっとりとした頃、陛下は私の少々長い襟足を優しくすいた後、顔を包み込むように持ち、目が合うようにそっと持ちあげた。

流れるような動作に、陛下の美しい紅い瞳と漆黒の髪が目映つてようやく私は自身の状況を把握した。湯気が出ているのではないかと言うほど顔が熱い。

陛下はそんな私を見て、3回、瞬きをした後、私の頬を親指の腹で撫で、微笑みながら、可愛いとおっしゃった。

そのお言葉と笑みに目が潤む。ああ、我が人生に一片の悔い無し！私はあまりの感動に口元が緩んでいたらしい。そっと口に何か柔らかないものが押し込められた。

頭で考えるよりも先に体が、陛下から与えられた物だという判断を下し、咀嚼する。口に入れられた物はどうやらサンドイッチらしかった。瑞々しいトマトや柔らかい鶏肉の味が口に広がる。

「美味しい？」

口にはサンドイッチが入ったままなので、必死に首を上下させる。

陛下が手ずから与えてくださる物が不味いなど、ありえない。それどころか、陛下の微笑みさえあればグゼル　灰汁の強い植物で、虫も食べない　でもお腹が一杯になるまで食べられそうだ。

「なら、よかった。実はお願いって言うのはそれについてなの」

「どういふことですか？」

出来ることならずと味わっていたが、泣く泣くサンドイツチを飲み込み、陛下の言葉に答える。

「これをね、届けて欲しいのよ」

そう言つて陛下が両手を前に出すと、そこに赤いシルクのリボンが可愛らしいランチボックスが現れた。蓋が開けられており、中に数種類のサンドイツチが見える。そこには私が頂いた物と同じものもあつた。

「はい。私などで宜しければ喜んで承ります。どちらに届ければ宜しいですか？」

私が承諾の返事をするに陛下は、ありがとう、と態々お礼までおつしやり届け先を私に告げたのだった。

魔王の領域は酷く閑散としているように感じられた。室温も陛下の領域よりも数度低いように思う。それは魔王の領域が城の北側にあるということもそうだが、それ以上に、領域全体に広がっている魔王の魔力の影響だろう。我らが陛下の包み込むような温かさがある魔力が恋しくなる。

こんな所に長居は無用と、移転し、現在魔王がいる執務室に向かった。

魔王の執務室の扉は3メートル程のもので、色が黒い事と細工がないことを除けば、陛下の執務室の扉となんら変わったところは見られなかった。

中に、魔王とその宰相がいるのが魔力から分かる。2人も私の存

在に気づいてはいるだろうが、特になにかする気配はない。取るに足らないことと思っっているのだろう。

私は呼吸音さえも大きく響く静寂の中、小さく深呼吸をしながら、左手に抱えたバスケットを確認する。赤いシルクのリボンが可愛いバスケットに汚れはない。リボンの形も完璧だ。私は今度は大きく深呼吸すると、目の前の扉をノックするために右手を挙げた。

陛下の命を果たすために、いざ！ 魔王戦へ！

扉に右拳をぶつけると、思いのほか大きな音が出た。頑丈な扉なので壊れたりしなかったが、長い廊下に音が反響した。

しばらくすると、「どうぞ、お入りください」と氷のように冷たい声が私のノックに答えた。

美声の部類に入る声のなのにも関わらず、嫌悪感を感じた。

「失礼いたします」

そう一言いい、私は扉を潜った。

敬語など魔王に対して使いたくなかったが、部下の教育がなっていないと、陛下が非難されては絶対に嫌なので、私は陛下の為に敬語を使った。

部屋の中は、扉から見て右側にクリーム色のソファがあり、正面には書類が山と積まれた大きな机、左側には同じく書類が積まれた机、他に棚3つと扉2つがあった。

魔王は正面にある机で黙々と書類を片付けていた。書類の山の所為で姿を見ることは出来ないが、ペンを走らせる音が途切れることがないことからそれが分かった。宰相は左側にある机から動いてはいないが、一応立ち上がり私を見ているので顔が分かった。

宰相は銀色の髪と金を散らした紫色の瞳をしていた。

魔族は魔力の質量と並行して、美しさが決まる。宰相である彼は、魔族の中では上位のものであるので、当然ながら美形であった。30代ほどに見えるインテリ系の美男子である。

だが、私の心は1ミリも揺らくことはない。私の心を震わせることが出来るのは、陛下唯お一人であるからだ！

私は臆することなく、陛下から与えられた要件を告げた。

「観測者様から預かってまいりました、魔王様宛のお昼のお弁当をお持ちしました」

“観測者様”と私が言った時点でペンの音がぴたりと止まった。宰相もそのことに気付いた様で、無言で書類の積まれた机の側を見ている。

一瞬、部屋に静寂が訪れたが、カタリという、恐らくペンを置いたのであろう音と共に魔王が書類の山から姿を現した。

その姿を見た瞬間、私は思わず目を見開いた。

魔王は魔族の頂点に立っているだけあって、ものすごい美形であった。宰相が霞んで見える。更に、これがフェロモン、と言うのだろうか？ 色香が半端ではない。5メートルは離れた位置にいるし、目が合ったわけでもないのに、背中をゾクゾクとしたものが走った。だが、陛下に全てを捧げたこの私が、その程度のことと驚くことはない！ 私が驚いたのは、魔王の色が陛下とまったく同じだったからだ。髪の色、瞳の色、肌の色と、全ての色が同じなのである。その所為か、魔王を見て思わず陛下を連想してしまった。

しかし、私はすぐにその考えを否定した。

陛下は愛らしくも凛々しい少女（宰相閣下曰く、17歳で成長

いや、老化というべきか？ が止まったそうだ）である。雰囲気気も柔らかく温かい。そばにいる者すべてに安心感を与えてくれる。対して魔王は、大人の色香が漂う男だ。しかも、危機感（命ではなく貞操の）を与える雰囲気がある。安心感など、色々な意味で感じることは不可能だ。

ああ、早く陛下の領域に帰りたい。こちらに来て5分も経っていないはずなのに私はすでに陛下の温かみが懐かしくて仕方がなかった。陛下のことを考えてしまったので余計にそう思う。

「籠目はどうした」

軽いホームシックになっていた私の耳に魔王の美声が入り込んだ。低く響く声には威厳が感じられたが、同時にゾワリとしたものを感じ

じ、全身に鳥肌が立つ。

魔王が言った籠目とは陛下がごく親しい者に呼ばせる渾名である。本名はブラット・イブラゼル・ファントムハイヴ様と仰る。ついでに言うと、魔王の名前はダーク・リデル・アルセンフォードだ。

「陛下に致しましては、只今外出中でございます」

その美声に身を固まらせた私だが、根性で、至って坦々と話した。魔王は私の言葉を聞いて、眉をピクリと動かすと、一瞬の間を置いて姿が消した。それと同時に手にあつた重さが消える。どうやらバスケットも一緒に持って行つたらしい。

魔王は恐らく陛下のもとへ行つたのだろう。魔王と陛下は半身とすることもあり、親友（間違つても恋人ではない。従者殿も否定していた）である。あんな男と一緒にいて平気だとは、流石陛下！ 私も見習わなくては！

取りあえず、これで陛下の命は遂行したことになる。完了を報告しに行く時の方法で悩んでいたのだが、魔王がバスケットを持っているのを見れば明白だろう。

肩の力が抜け、小さくため息を零す。

魔王の存在もそうだが、陛下からの初めての命令で、私はかなり緊張していたらしかった。

「まったく、まだ仕事は終わっていないのですが」

……すっかり宰相の存在を忘れていた。宰相は決して存在感が薄いわけではない。寧ろ濃い。町ですれ違えばほぼ全員が振りかえるだろう美貌もそうだが、氷の様な雰囲気は何よりも存在を主張している。

宰相閣下も氷の様な雰囲気を持っているが、この人ほどではない。まあ、宰相閣下は種族が淫魔とすることもあって、魔王ほどではないが色香の方が気になる。

「で、あなたは何時までいるつもりですか？」

確かに用事が終わったにも関わらず、執務室と言う重要書類が集まる場にいるのは迷惑だろうが、その言い方はいかなものだろう

か？

思わず眉間に力が入ったが、ここで怒ってはあまりにも子供である。

私は、ここにきて初めての笑みを浮かべると、優雅にお辞儀をし、部屋を辞した。

「申し訳ありません。あまりに存在感がありませんでしたので、宰相様のことを忘れていました」

私はまだ18歳。怒鳴り散らすほど子供ではないが、怒りを完全に我慢できるほど大人ではないのである。同僚に短気だと揶揄されることもあるが、それは同僚の気のせいだ。

扉の隙間から、僅かにだが眉間に皺を寄せた宰相の顔が見れたので、今回のことはこれで許してやろう。

私は、人生最大の仕事を終えた達成感を感じながら、移転して部屋に向かったのであった。

今回の報酬に陛下から頂いた、陛下特製のサンドイッチを頂くために。

この時、私は浮かれ過ぎて失念していた。

観測者様である陛下の仕事は、世界中の文化などを記憶することである。そして陛下の部下である私達の仕事は、迅速かつ正確に情報をお持ちすること。つまり、情報収集は私達の十八番。この世界で起こったこと、しかも陛下のことで私達が知らないことなど何一つない。同僚や、ましてや上司が私と陛下が接触したことに気づかないなどと言うことはあるはずがなかった。

折角、陛下から頂いたサンドイッチは、希望者（観測者様部下全体の3分の1）でじゃんけんをし、勝利した15名（サンドイッチが15個だった）が食べることとなった。希望者は皆、10代から20代（見た目であって実年齢は不明だ）の者だ。残りの3分の2の大人達（見た目は20代から30代だが、籠目に仕えて30年以上の者）は、微笑ましそうにこの騒ぎを見守っている。

私はすでに1つ、しかも陛下から手ずから頂いていると言つこと

で不参加となった。

初めは、なぜ私が頂いたものをやらねばならんのだ！ と憤慨したが、同僚の心底羨ましそうな視線を受け、怒りは急激に萎んだ。彼らの気持ちは十分すぎるほどに理解できる。

宰相閣下が、あまりの騒ぎにいぶかしみ作業室に来たが、今の彼らの脳に宰相閣下に構うほどのスペースはない。宰相閣下は、この騒ぎを温かく見ていた部下に騒ぎの原因を聞き、彼らに馬鹿にするような視線を投げかけていた。

仕事中はずっと陛下のお傍にすることが出来る閣下には理解できないのも無理はない。

宰相閣下の冷たい視線と、外野の温かい眼差しの中、彼らの聖戦の火ぶたは切られた。

後日、この騒ぎを聞きつけた陛下が時々ではあるが、数回に分けて全員に差し入れを用意して下さるようになった。

私達が狂喜乱舞し、陛下への尊敬を更に深めたことは言うまでもないだろう。

観測者部下の戦い（後書き）

書き終わって、気がつきました。

セルデインの性別が男とも女とも取れそうなしゃべりになっている！？

面白いので性別は、秘密とすることにしておきます。

メインの方で、でそのうちセルデインを出そうと思っているのでその際に分かってしまうと思いますが。

あと、部下達の籠目への愛は、尊敬であって、恋愛感情はありません。

純粹な敬愛です。

因みに、見守っていた部下達は、若い部下達よりも籠目を敬愛していますが、長く籠目に仕えているので彼らよりも籠目の性格を把握しており、結果が分かっていたので参加しなかっただけです。

長々と失礼しました。

魔王侍女の休日

深夜2時、私ワタクシ 笙香鈴ショウコウリン は、本日の臨時業務が終了し、一先ず自室に戻ろうとしている所でした。

廊下の窓から外を見ると、夜の帳が降り、月が優しく世界を照らしています。人口灯が殆ど存在しないこの世界は、人がいない場所は闇で黒く塗りつぶされていました。

殆どの住民達は、深く安らかな眠りの中を漂っていますが、大通りの飲み屋は一部開店していて煌々とした明りを発しながら、男達の明るい笑い声を響かせているだろうと思います。

ですが、北側に面している魔王の領域からは、そんな光を一切目にすることはできません。窓から見える光景とえば、目の前に広がる黒い海と観測者の領域にある、森の名残だけです。時折、クラークンの深い雄叫びが空気を震わせます。

私はその雄叫びに不快は感じませんが、少々疲れを覚えてしまいます。

海に住んでいるクラークンは遊び好きの寂しがり屋で、いつでも構ってくれる相手を探しているのです。

昼間は人間や獣人などの子供が相手をしていてくれるので静かなのですが、その子供たちは今は眠りの中です。

この時間帯に活動する魔族の子供が相手をすれば良いのかもしれませんが、この世界の魔族の出生率はとても低いため子供があまりいません。100年に1人生まれれば良い方です。

魔族は、魔力の質量が良いほど、出生率は下がります。（魔力が良質ならば、その分だけ寿命も長い 老化がない ので問題はありませんが）

ある程度の差はありますが、この世界にいる魔族は漏れなく全員がチートであり、陛下に至ってはバグモードです。

何しろ、一介の侍女でしかない私も他世界ならば魔王クラスの強

さです。決して誇張ではなく、純然たる事実です。

ですから、子供は当然生まれ辛く、今現在、合計17人しか子供はおりません。

その子供達も皆、ある程度の年齢に達しており、クラーケンと遊ぶよりも知識を取りこむことや戦い方を学ぶことに夢中なのです。

皆とても優秀で、将来はきっと陛下の有能な部下になってくれることでしょう。

その結果、クラーケンは遊び相手は居らず、夜になると毎日悲しげな声を響かせているのです。

そんなことを考えているうちに、侍女待機室に到着しました。

そこは作業用の机とロッカーが並べられた、着替え専用の部屋です。私も侍女服から私服に着替えると直ぐに部屋を出ました。

ノブを捻る時にある術を発動させます。そして扉を潜ると、出たのは廊下ではなく私が暮らす家の寝室です。

部屋には、白いレースのテーブルクロスが引かれたローテーブルと、同じくレースのカバーがついたソファ、そして花柄でフリルのたっぷり付いたベッドがあります。ベッドは勿論天蓋付きです。

レースやフリル、黒より白が大好きな私の部屋はプリンセステイストで実に愛らしいです。和みます。

城はとても大きなものですが、城に努める大人の8割が通いです。城の部屋は子供と体の弱ってきた高齢者のみの利用とされています。

そこで、私も含めてこの城に滞在する方達が利用するのが『監守の鍵』と言う魔法です。これは遠くにある扉同士を繋げる簡易召喚術です。

この術はどこの扉でも利用可能なので、仕事の小休憩でも家に帰る方もいます。

移転でもこれは可能ですが、監守の鍵の方が城に張られた自動修復魔法に与える衝撃が少ないので良く行く場所の場合はこちらの利用頻度が高いのです。

お風呂に入って着替えなければと思いましたが、昼型の吸血鬼で

ある私に夜の臨時業務はかなり辛いものです。その為、眠気に抗うことが出来ず、そのままベッドで寝てしまったのでした。

カーテンの隙間から漏れる太陽の光に、私はゆっくりと目を覚ましました。

化粧を落とさずに眠ってしまったので顔がなんだか気持ち悪いです。

低血圧な私は緩慢な動きで寝室に隣接されたバスルームに向かいました。

2時間ほどかけて、食事から着替えまで全て終えた私はそこで初めて時計を見て驚愕しました。

起きた時間が遅かったのでしょうか、時間はすでに12時を過ぎています。

勢い良くローテーブルに置かれた小さなカレンダーを見ると、今日の日付の所に『11時にリリアケーキ店』と書かれていました。

今日は友人と遊ぶ約束をしていたのです。

私は白いリボンが愛らしいハンドバックを掴むと待ち合わせ場所に移転しました。

リリアケーキ店の目の前に到着すると、友人　アイラ「ウォーカー　と直ぐに目が逢いました。

アイラは種族が竜人と言うこともあり、身長が180センチ以上あります。豊満な胸と腰まであるキャラメル色の髪が実に魅力的な女性です。

竜人はどの種族よりも五感が優れているので、私の匂いで気付いたのでしょうか。

気まずい私が暗い顔をして近寄ると、オープンテラスに座っていたアイラは態々立ち上がり私を迎えてくれました。

「おはよう。遅かったけどなにかあったの？」

アイラは、20センチは下にある私の顔を覗き込むように見ました。彼女のターコイズブルーの瞳に私を責める色は一切なく、ただただ心配しているのが伝わりました。

ただの寝坊だと言うのが非常に言いづらく口ごもっている、アイラの瞳は悲しみに染まっていき、それは顔全体に広がりました。

「もしかして、私になにかしたのかしら……？」

「い、いえ、違います！寝坊してしまっただんです！」

アイラの悲嘆的な言葉に私は慌てて謝罪しました。彼女に悪い所など一切ありません。

「そう、ならよかつたわ。寝坊のことは別に気にしないからいいわ。あなたは真面目な子だもの、何か理由があるのでしょうか？取りあえずケーキを食べましょう」

アイラはそういうと、ウェイターを呼び、ケーキの注文をしました。

ケーキはすぐに来て、4人がけのテーブルの上は指の置場もないほどケーキで溢れています。

「どれもおいしそうね！早く食べましょう！」

アイラは目を輝かせてそういうと、目の前にあったシフォンケーキにフォークを差し込みました。

私はまだ謝罪していないことに気づき、謝らなければと口を開くと、そこに彼女が口に運ぶ予定だったシフォンケーキが輸送されてきました。

驚いて目を大きくした私を見て、アイラは楽しそうに笑うと「謝るより私を太らせない為にケーキを食べなさい」と言いました。

竜人は、獣人の一種で、竜体と人体のふたつの姿を持っています。が、どちらかと言うと竜体が本体です。

以前見せて頂きましたが、彼女の竜体は尾も入れれば200メートルはありそうな巨体でした。そんな彼女がこの程度の量を食べた所で太らないことは子供でも分かります。

彼女のあからさまな気遣いを嬉しく思い笑うと、彼女は満面の笑

みを浮かべました。

私達はその後、ケーキを何度もお代わりしながら（主に彼女ですが）、世間話に花を咲かせていました。

職場の話、大食堂の新メニューの話。

そして話は定番の恋話に移り替わりました。

私に恋人はいないので彼女の番つがいの話です。

彼女は先月、ある男性の番となったのです。

竜人の男性は一生を添い遂げる相手が本能的に分かるらしく、その相手をひたすら探しています。その相手同士のことを番と呼びます。まさに運命の相手ですね。

問題は、男性は分かると言う点です。女性にはそれは一切分からず、男性から言い寄られて初めて自身の番を知るので。

そして、運命の相手と言う文句に流されるほど竜人の女性はロマンチストではありません。何しろ番になるということは命を懸けることと同意義なのです。

番は唯一無二の相手ですが、お互いの血と真名を交換して初めて番となります。

これは、最上級婚姻契約と言われるものです。

死さえもふたりを別つことが出来なくさせます。悪く言えば、片方が死ねばもう1人も死ぬという共倒れのものです。

彼女もその男性と番になるまでに半年間お付き合いをしていました。

私は2回、その方に会いましたが、金髪碧眼のまるで王子様のような方でした。口調が少々おじさんの様でしたが、この世界では見た目で年齢は判断不可能です。

それに年齢を気にしては誰とも付き合えませんから、そこは私もアイラも全く気にしませんでした。

1回目は終始にこやかに終わりました。感想と言えば、彼の彼女への表情と言うか、雰囲気と言うか、兎に角全体として甘すぎて、第3者である私まで顔が熱くなってしまいました。

後から彼女に聞きましたが、この状態は出会って間もない番に酔っている状態で、しばらくすれば落ち着くそうです。

2回目はそれから1カ月ほど過ぎた頃だったのですが、それは会って1分もしないうちにお開きとなりました。理由は、彼が私をまるで親の敵のように睨んでくるからです。いえ、正確には睨んでいませんでした。笑顔で殺気を飛ばしてくるのです。

別に怖くはないのですが、意味の解らない敵意ほど不愉快なものはありません。

私も思わず睨み返し一触即発な空気になりましたが、彼女も彼が殺気を放っていることに直ぐに気がついたので、その場でお開きになり事無きを得ました。

これもまた、後日彼女に聞いた話なのですが、彼が私に殺気を飛ばした原因は竜人の男性の特徴としか言えないものでした。

竜人は、ほぼ最強の種族である為か皆さん優しい性格です。勿論、性格は個人個人で違うので粗暴な方もいますが根本は優しいのです。ただの竜と竜人の違いは人体を取れるかよりも、ここなのでしょう。

ですが、同族意識と番に対する独占欲が非常に強いので、その部分（正しく逆鱗）に触れると、竜としての凶暴性がでます。

特に竜人の男性が番の女性に向ける独占欲は、他の種族からすると狂愛のように感じられます。

私は今まで、女同士ならば問題はないでしょうと思っていましたが、どうやら違ったようです。

彼の怒りは、彼女が私と会う前日に話した事が主だった原因でした。

『香鈴は私の一番の友人なの』

この一言が駄目だったそうです。特に『一番』と言う言葉が。

これには私もアイラも何も言えませんでした。

「例の彼は番になって少しは落ち着きましたか？」

私は彼のことを思い出しただけで疲れを感じました。

愛故に、たとえば聞こえはいいですが、私からすれば息苦しいだけです。

そんな彼と番になろうと決断したのですからアイラは凄いのと思います。

「まあ、独占欲の方はある程度ましになったわ。でも、その…いえ、なんでもない」

彼女は言い淀む前にちらりと私を見ました。

その行動で私は直ぐに察しました。

私の見た目は15歳程です。仕方ありません。成長が止まってしまったのです。

しかし、彼女には言っていないませんが実年齢はすでに69です。

番が出来るまで清いお付き合いしか出来ない竜人の女性よりも遙かに経験豊富です。

恐らく、夜のほうが凄いのでしょう。

何しろ狂愛と言われるほどです。

番外の男性と清いお付き合いしか出来ない理由も、男性が番の女性と体の関係を持った元恋人を殺しまわる事件があったからですし。

アイラは見た感じ体に異常はなさそうです。無理をさせられてはいないのでしょう。

竜人の男性は自身よりも番の事を大切にするそうですから、ある程度のお願いは聞いてくれると聞きました。勿論それにも限度はありますが。

ああ、そういえば、その有名な話がありました。本当にあった話だそうで、教訓として本になっているのです。

「アイラ、確か事実をもとにして書かれた、お願いに関する竜人の話がありましたよね。内容を覚えていますか」

アイラは私の話の振りに一瞬不思議そうな顔をしたが、直ぐにどんな話か簡単に話し始めました。

流石、観測者様の元で働いているだけあってその話し方に淀みは

ありません。

「この国に竜人が来て間もない頃に、竜人の男が淫魔族の女を番にした話ね。女は男の一途な思いに引かれて番になったけど、元々多情な性質の淫魔は1人では我慢できずに浮気をしたのよ。それで、誘ったのは女の方なのだけれど、竜人の性で男は浮気相手の男を殺し回るのよね。結局それが竜帝陛下にはれて、男と女は竜騎士に捕まったの。竜帝陛下は女に浮気を止めるように言ったのだけれど、女はそれを拒否して、男に『淫魔族にとってあれは食事なのだから我慢して』と言ったのよ」

アイラはそこまで言うと、またケーキを1つ食べ、ウェイターに追加注文をしました。

すでに100皿は食べている気がします。

「それで男は1回だけ我慢したのだけれど、その我慢の所為で狂ってしまった。結局、番の女を殺して、最上級婚姻契約によって自身も死んだ、と。これでおしまいよ」

「そうそう、そんな話でしたね」

「まあ、これは竜人が来て間もなく、その性質を知らなかったって言うこともそうだけれど、それ以上に女の考えが足りないと思うのよね」

私も、それもそうですね、と思いひとつ頷きました。

そんな私を見て、アイラは悪戯をする子供の様に笑って言いました。「香鈴は竜人の男に『君が番だ』って言って言い寄られたらどうする?」と。

その言葉に私は思わず固まってしまいました。

竜人の男性の愛を息苦しいと思います、その一途さを羨ましいと思うことも少しあるのです。女ならば誰だって自分を一番に考えて欲しいものです。

私が答えに詰まっていると、アイラに「タイムアップ」と言われました。

意味が理解できず首を傾げると、その甘ったるい声が耳に届きま

した。

「アイラ！」

番の彼がどうやら迎えに来たようです。

いえ、もう旦那さんと呼ぶべきですかね。名前は2回目に会ったときから呼ぶ気が無くなってしまいました。

私が振り向くのとほぼ同時に、旦那さんは私の脇を抜けてアイラの手を取りました。

私は店の方を向いていたので、背後から来た旦那さんに気づくことができませんでした。

気を抜いていたからとはいえ、まったく気づけないとは、一生の不覚です。この世界は平和過ぎて勘が鈍ってしまつようです。嬉しいことですが、気をつけなければなりませんね。

旦那さんは私を一瞬見ると、前ほどではありませんが、やはり殺気を飛ばしてきました。

アイラが視線だけで謝ってきたので、構わないと首を振っておきました。

この程度なら大丈夫だとは思いますが、アイラがあの話の女のようになつては嫌ですからね。

話に夢中になつていて気付きませんでした。時間は6時になっていました。

もう、空は暗くなってきていましたが、大人からすればまだまだ遊べる時間です。

しかし、甘い空気と殺気のダブルコンボに私は耐えられそうにありませんので、やはりアイラの言う通りタイムアップです。

アイラはまだケーキを食べたそうなので、私がお暇することになりました。

私の別れの言葉を聞いて、あからさまに喜ぶ旦那さんにイラつきましたが、アイラが何か囁くと顔を真っ青にして謝ってきたので特に何も言いませんでした。

アイラはいつたい何と言つたのでしょうか。次に会つたときにぜひ

聞かせて貰いたいと思います。

そして、旦那さん。たった1ヶ月ですでに尻に敷かれているのですね。

見た目は王子様の様なのに、中身はヘタレっていて残念です。

ですが、アイラの為に半年も（色々と）我慢し、女の私に嫉妬するほどアイラを溺愛している旦那さんです。必ずアイラを幸せにしてくれるでしょう。

アイラも旦那さんが来てから瞳がきらきらと輝いて3割増しで美人に見えます。

私は友人の純愛に、自分まで幸せな気分になりながら家路につきました。

翌日、電話でアイラが実は妊娠4カ月だと知らされ、純愛に見せかけて出来ちゃった婚ですか！ と私は衝撃を受けるのですが、この時の私はそれを知るよしもありませんでした。

出来れば知らないまま終わりたいかったです。

従者の必然

冷たい雨は止めどなく僕の全身に降り注ぐ。異物が自分に触れている感覚は、気持ち悪くて堪らなかった。

髪や頬には泥がこびり付き、透明な雨は茶色く変わって僕の下に溜まっていく。

僕、クラッド・シルフルは、高いビルとビルの間にある裏路地に満身創痍で横たわっていた。

瞼を動かすのも億劫だ。

呼吸音が五月蠅いほど耳に着く。

どうしてこうなってしまったのだろうと、僕はこうなった経緯を追想した。

こんなことに意味は無いを分かっていたが、気を紛らわさないと気持ち悪さで頭がどうにかなってしまいそうだった。

僕はシュバリエと言う種族だ。

シュバリエは、人型以外に龍体を取ることもできる、不老の種族である。金髪金目をしており、自分で言うのもなんだが、漏れなく秀麗な顔立ちをしている。また、あらゆる能力が高く、出来ない事は殆どなかった。

だが、一つだけ大きな欠点があった。どんなに頑張っても、十歳になる前に何らかの病に罹り死んでしまうのだ。そう、免疫力が非常に低い種族なのである。

しかし、助かる方法が一つだけあった。

それは契約である。

自身と他人に繋がりを作り、魔力を分けて貰うことで自己回復力を上げるのだ。

免疫力自体を引き上げることは無理だったが、病が発症する前に回復させてしまうほどの回復力を手に入れることで問題は解決される。

シュバリエが生き残るにはこれしかなかった。

当然ながら問題はある。シュバリエはこの術で大きく三つの問題を背負うこととなった。

一つ目は、魔力の相性が良くなければならない事だ。相性が少しでも悪いと、自己回復力に上手く変換することが出来ず、共倒れになってしまうのだ。そして残念なことに、本当に相性が良い相手を見つuckerのは、とても難しい。僕も含めて、それなりに相性の良い相手を死なないうちに転々として行くのがシュバリエの常だった。

二つ目は、魔力の質量の問題である。質と量のどちらかが悪くとも片方でカバーすることは可能だ。問題は、魔力の質は生まれながらに決まっているので良くすることは出来ないということと、魔力の量が回復する速度は一定であると言うことである。だから、どんなに相性が良い相手がいたとしても、質も量も悪ければ需要に供給が間に合わず、共倒れになってしまうのだ。

三つ目は、契約の内容である。相手から魔力や生命力と言った重要なものを貰うからには、こちらもそれ相応のものを支払わなければならぬ。しかも主導権は常に向こう側にあるので、どんなに頑張ってもあちら側が有利な契約になってしまう。最悪の場合、奴隷のような契約条件を結ばされてしまう仲間もいた。救いは、僕らが使用する契約術には、こちら側の判断だけで契約を破棄することが出来る裏技があることだった。

この三つの問題を全てクリアすることはとても困難だ。

その為、この問題を全てクリアすることが出来る契約相手の事をシュバリエは、至宝という意味を込めて『リーシャ』と呼んだ。

僕の父は、大体三百年ほど掛かって、リーシャを見つuckerことが出来たと言っていた。因みに、父のリーシャは、僕の母でもある。金髪に深緑の瞳をもった美しい女性だった。

僕は七歳の頃に初めて契約を結んだので、僕の中の母の姿はその時から止まっている。シユバリ工は、契約を結んだ時点で独り立ちと考えるので、それっきり実家には帰っていない。

そして現在。

十二歳の僕は当然と言えば当然だが、まだリーシャを見つけないとが出来ていなかった。

だから初めて契約を結んだ相手との契約を未だに継続していた。魔力の相性は悪くない方だったし、質は悪かったが、それを十分カバーできる程、量が多かった。

また、契約内容が良かったのも継続理由の一つである。

契約内容を簡単に説明すると、契約相手とその家族を主人とし、使用人として働くと言ったものだった。

相手は侯爵と言う地位を持っていたので、使用人をすでに何人も雇っており、環境は万全だった。

僕はこの生活に不満はなかったため、リーシャを見つかるまではこのままで良いと考えていた。

しかし、問題は起こった。

契約相手には、僕と同じ年の娘がいた。その娘が僕のことを好きになってしまったのである。

これだけならば、それほど問題は無かった。

彼女は十四歳で社交界デビューすることが決まっていたので、時間が解決する問題だった。

しかし、僕の性質と相まって問題になってしまったのである。

僕は、自身で異常だと自覚するほどの潔癖症なのである。食事は自分で作ったものでなければ食べられないし、衣服も自分で一度洗濯しなければ絶対に着ることが出来なかった。また、普段から白い手袋を着用しており、素肌になんかが触れることがあれば嫌悪を隠すことは難しかった。

僕ははつきりとこの事を公言していたし、周囲の大人たちは元々育ちが良い人達ばかりだったので、無遠慮に僕に触れることは無か

った。

しかし、十二歳の少女にそんな事を本当に理解してもらうことは出来ず、彼女は無遠慮に僕に触れたのである。

一人娘と言うこともあり、蝶よ花よと育てられた、悪く言えば甘やかされて育てられた彼女は、僕のあからさまな拒絶に癩癩を起した。

そして契約相手、彼女の母親に言ったのだ。

「お母様、クラッドを私の従者に頂戴？」と。

この言葉を聞いた時、僕は彼女への認識を改めた。

それまで僕は、彼女のことをよく言えば無邪気、悪く言えば馬鹿な娘だと思っていた。

だが、僕の事を好きだと言わず『従者に欲しい』と要求するあたりに狡賢さが出ている。

契約相手の娘への甘やかしぶりは、五年間で十分すぎるほど見てきた。どんな命令を下すかなど、愚問である。

僕はすぐさま契約を解除し、荷作りもせず、国を出た。

しかし、それで終わりになるほど彼女の僕への執着は甘くは無かった。

彼女 正確には彼女の両親 は、金に糸目を付けず、僕を連れてきた者には報奨金を出すと言ったのである。

シユバリエは人間よりも遥かに身体能力は優れていたのです、初めのうちは難なく逃げ果せていた。

しかし、一週間も経つ頃には免疫力が殆ど無くなり、病にかかった。

新しい契約相手を見つけることも出来ず、体長はどんどん崩れて行った。

そして、最悪の体調の時に運悪く、手荒な者に襲われてしまったのだ。

全ての追想が終わり、あまりの運の無さに笑いが漏れた。それと同時に口に血の味が広がった。

喉か口内が切れた様だ。いや、もしかしたら肺かもしれない。

悔しさと、無念さと、そして何より寂しさで涙の膜が張り出した時、幼い子供の声が聞こえた。その声は「お兄さん、大丈夫？」と優しく語りかけた。

その声は妙に響いた様に聞こえ、同時に何か温かい物に体が包まれる。そして気付くと体の痛みが薄らいでいた。

「……あれ？ 少し再生させたんだけど、足りなかったかな。話せる程度に再生って意外と難しいね」

ワントーン落ちたその声に慌てて、「だい、じょう、ぶ」と答えた。話すと胸に苦しさがあったし、声は酷く擦れていたが、彼女には届いたらしい。「ならよかった」と返事を貰った。

地面に落したままだった視線をゆっくりと上げると、茶色のタッセル・スリッポンが見えた。雨の中にいるはずなのに水滴ひとつ付いておらず、艶がある。靴のサイズから、まだ五歳ほどだろうと見当をつけた。更に視線を上げると、かなり質の良い濃紺のスカートが見える。これ以上は視線を上げることが出来ず、分からない。

しかし、これだけでも彼女がどこかのお嬢様らしい事は分かった。お嬢様がこんな所に一人でいることは可笑しいと思ったが、呪歌も無しに術を使えると言うことは、かなりの実力者である。魔術師は一騎当千の実力を持つているので、彼女にとつての危険などそうそう無いのだろう。一人でいるのも何処からかこっさり抜け出してきたのかもしれない。魔力を一切感じないが、魔力を隠すほどの力があるならば尚凄い。

そんなことを考えていると、彼女の小さな両手が僕の左肩に触れ、何を思ったのか、かなり乱暴に僕を仰向けにした。衝撃で薄らいでいた痛みが急激に戻ってくる。咄嗟に頭と左肩は庇ったが、全く力の入っていなかった左足に激痛が走った。

声も無く浅い呼吸を繰り返していると、「あ、ごめんね」と言い、彼女の手が僕の額に乗せられる。そこを中心に先ほどとは比べものにならない温かさが広がっていった。濃い甘い香りがしたが、なん

の香りかは分からない。

心地良さにうつらうつらしてきた頃、彼女の手が引いた。同時に温かさも甘い香りも薄くなる。

僕はゆっくりと上体を起こし、自分の体を眺めた。目に見えるところしか分からないが、体の傷は跡形もなく消えている。それどころか、病の症状も消え、体の痛みも一切感じない。

あまりの事に茫然としてしていると、後ろから「ちよつといい？」と言う声が聞こえた。

慌てて振り返ると、そこには黒髪紅目の少女がいた。

身長は、座っている僕と同じぐらいで、やはり四、五歳ほどの子供だ。

幼い顔は可愛らしいと言えるが、美少女とは言えない平凡な顔立ちだった。だが、子供のものとは思えない思慮深い目が印象的だ。

彼女は自分の傘に僕を入れてくれており、雨粒に邪魔されることなく、彼女の顔を見ることが出来る。

僕が、彼女の髪は濃い茶色なのではなく本当に黒いのだと気付く程見つめていると、彼女は僕の頬に触れようとゆっくりと手を動かした。

避けようとも思ったが、すでに触れられ、しかも嫌悪感を覚えなかったことに気付き、衝撃から固まっている中に彼女は僕に触れていた。

やはり嫌悪感など覚えず、温かい体温が広がる。

その温かさに幸福感を覚えると……なぜだか、涙が溢れた。泣いている訳が分からず戸惑いながら彼女を見る。

ぼやけた視界で捉えた彼女は、驚いた様子を睨いた後、そつと僕を抱きしめた。

彼女の方が僕よりずっと小さいので、抱きつかれていると言う表現の方があっているかもしれない。だけど、僕は彼女に抱きしめられていると思った。

彼女にしがみ付き、僕は泣きすぎて頭が動かなくなるほど泣いた。

泣いている間、彼女はずっと僕の背を撫でてくれていた。

満足するまで泣き終わると、不思議な満足感に包まれ、緩やかな眠気に誘われる。

今までの疲れが出たこともそうだが、彼女から香る甘い匂いが安心感をもたらしている様だった。

瞼も閉じられ、眠りに入ろうとしている僕の頭に彼女の声が響く。「お兄さん。眠るのは良いけど、家の場所を教えてください。送っていくから、ね？」

幼子に使う様な口調だったが、全く気にならなかった。

しかし、その意味に気付き、必死に首を振る。殆ど動くことは無かったが、僕の顔は彼女の首元に埋まっている状態なので気づいてくれるだろう。

「あんな怪我してたって事は何処からか逃げてきたの？」

案の定、彼女は困った様な声で、そう言った。

その言葉に答えることなく、僕の意識は途切れた。

人の気配がする。距離はあるが、同じ部屋にいるのは確かだ。

何者かが宿に侵入して来たのかと思い、慌てて起きようとしたが体がまったく動かない。起きているのは頭だけで体は眠った状態の様だ。薬でも使われたのだろうか？ それとも侵入者の術か？ 必死に、何故こんな状態になっているか考えて、眠る前の状況を思いだした。

浮かんだのは甘い香りを纏わせた、紅い目の少女。

「起きた？」

記憶にある声が耳元で響いた。こんなに近づかれていた事に気付かず、驚きに心臓が鳴った気がする。体が動くのなら、確実に飛び上がっていただろう。

「食事を持ってくるから待っていて」

返事の出来ない僕に彼女はそう言つと、額を優しく撫で部屋から出て行った。

なぜ、僕が起きていることに気付いたのだろうかと疑問に思いながら、僕は何とか体を起こそうと力を入れる。すると今度は簡単に起き上がることが出来た。

驚きに目を見開きながら、彼女が触れた額に手を当てる。そこにはほんのりと温かさが残っている気がした。

暫くそうした後、僕は部屋の中を見まわした。部屋はどこかの宿屋の物らしく、僕が眠っているベッド以外にはテーブル一つと椅子二脚しかない。壁や床、シーツの質から安宿ではないと思われるが、彼女の能力や衣服には釣り合いが取れているようにはとても思えない。

怪訝に思いながらも、ベッドから足を下ろした。ここまででもらつておいて、食事の世話までもらうのは流石に不味いと思い、彼女を手伝うために部屋の出口まで足を進める。彼女のお陰で、本当に回復したらしく、羽のように体が軽い。

しかし、扉のノブを掴み、押そうと力を入れた所で視界がぶれた。そして腰に来た痛み、足の力が抜け、床に腰をしたたかに打ちつけたのだと気付く。

驚きから一瞬思考が止まってしまったが、すぐに必死に立ち上がろうと足に力を入れた。

だが、足は全く言うことを聞かず、叩いても感覚がない。

もしかや二度と歩けないのでは無いかと言う恐怖を感じ始めた時、扉が開かれた。

そこには、食事が乗っているトレイを持った彼女がいた。

僕は相当情けない顔をしていたに違いない。彼女は扉の目の前にいた僕に驚くこともなく「大丈夫？」と声をかけた。

危ない所を助けて貰ったとはいえ、いや、助けて貰う前から、僕は会って間もない彼女を根拠もなく信頼していたようだ。

すぐに分かることとはいえ、自分から弱味を見せる様なことを僕

はする様な性格ではない。

でも、僕は彼女に「足が動かない」と涙声で縋っていた。

しかし、僕の言葉を聞くと彼女は「なんだ、そんなことか」と苦笑気味に言い、脇を通り抜け机に向かって行く。

僕は、彼女の瑣末な事を言われた時の様な言葉と表情に恐怖を覚えた。彼女からすると、僕の足が動かないのは自明ことだと言っただろうか。

「ま、待って」

僕が情けない声を上げながら、腕の力で彼女を追おうとすると、そのことに気付いた彼女が慌てて僕の元に戻ってきた。

トレイが乱暴に机に置かれ、食器が嫌な音を立てたが全く気にならない。

僕は戻ってきた彼女の腕を掴むと、何か言おうと口を開いた。

しかし、言いたいことが多すぎて、僕の口は開いたまま何一つ音を発しない。

動かない足、言葉が出ない口、僕はあまりの情けなさに顔を歪め、下を向いた。

彼女は僕の言葉を暫く待ってくれていたが、僕は何も言えない。

すると、彼女は僕の手を外し……僕を抱き上げた。

膝の下と肩に腕を回される持ち方は正にお姫様だつこである。

したことはあるが、されたことは無い体勢に沈んでいた思考も吹っ飛ぶ。

固まってしまった僕を不思議そうに見た後、彼女はゆっくりと歩き出した。

広い部屋ではないので、僕がベッドにそつと下ろされるまで一分も掛からない。

だが、僕にはとても長く感じられた。

お礼なり文句なり、言うことはあつたはずだが、その時の僕に出来たのは顔を真っ赤にして閉口することだけだ。

そんな僕に彼女は何も言わず、食事を差し出してくれた。

僕は恥ずかしさを誤魔化す為にも、ただ必死に口の中に食事を掻きこんだ。

彼女がそんな僕を面白そうに見ていたことに、僕が気付くことは無かった。

この後、「拾ったものは最後まで面倒みるようにシャロンに言われてるんだよね」と言う彼女の理由からコンクエストヴェールンスと言う国に連れて行かれた。

そこで彼女の世話になり、様々な教育を受けた僕が彼女に契約を申し込んだのは、出会いから一年程経った頃である。

まさか、「この為に助けたんだから」と笑顔で言われるとは思わなかったが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4158z/>

観測者と三人の王 番外編

2012年1月6日17時48分発行